

スタッフ紹介

済生会熊本病院 消化器内科



消化器内科部長代行

上原 正義 うえはら まさよし

- ・日本消化器病学会 九州支部評議員 指導医
- ・日本消化器内視鏡学会 九州支部評議員 指導医
- ・日本内科学会 総合内科専門医
- ・日本消化管学会 胃腸科指導医
- ・日本がん治療認定医機構 がん治療認定医



消化器内科副部長

浦田 淳資 うらた あつし

- ・日本消化器内視鏡学会 学術評議員
- ・九州支部評議員 指導医
- ・日本消化器病学会 指導医
- ・日本内科学会 認定医
- ・日本胆道学会 指導医
- ・日本病院会 病院総合医
- ・日本医師会 認定産業医



消化器内科副部長 兼
カテーテル・低侵襲血管内治療センター
副センター長

工藤 康一 くどう こういち

- ・日本消化器内視鏡学会 指導医
- ・日本消化器病学会 指導医
- ・日本医学放射線学会 研修指導医 診断専門医
- ・日本インターベンションラジオロジー学会 IVR専門医
- ・日本内科学会 研修指導医 総合内科専門医
- ・日本消化器がん検診学会 総合認定医
- ・日本門脈圧亢進症学会 評議員
- ・IVR領域技術認定医 内視鏡領域技術認定医



消化器内科副部長 兼
TQM部医療安全管理室室長

吉田 健一 よしだ けんいち

- ・日本消化器病学会 指導医
- ・日本消化管学会 指導医 専門医
- ・日本消化器内視鏡学会 指導医
- ・日本消化器がん検診学会 総合認定医
- ・日本内科学会 認定医
- ・日本がん治療認定医機構 がん治療認定医



医長

江口 洋之 えぐち ひろゆき

- ・日本内科学会 認定医



医長

上川 健太郎 かみかわ けんたろう

- ・日本消化器病学会 指導医
- ・日本消化器内視鏡学会 指導医
- ・日本超音波医学会 指導医
- ・日本肝臓学会 専門医
- ・日本内科学会 認定医



医長

須古 信一郎 すこ しんいちろう

- ・日本消化器病学会 専門医
- ・日本消化器内視鏡学会 指導医
- ・日本内科学会 認定医



医長

山邊 聰 やまべ さとし

- ・日本消化器病学会 指導医
- ・日本消化器内視鏡学会 専門医
- ・日本肝臓学会 専門医
- ・日本内科学会 総合内科専門医



医長

糸島 尚 いとしま ひさし

- ・日本消化器病学会 専門医
- ・日本消化器内視鏡学会 専門医
- ・日本内科学会 総合内科専門医



主任医員

古川 歩生 ふるかわ あゆみ

- ・日本内科学会 認定医
- ・日本プライマリ・ケア学会 認定医
- ・日本医師会 認定産業医



主任医員

前田 大樹 まえだ だいき

- ・日本内科学会 認定医
- ・日本消化器病学会 専門医



医員

水田 貴大 みずた たかひろ



医員

豊田 俊徳 とよた としのり

専門医が中心となって
24時間体制で診療にあたります

[サイクル]

済生会熊本病院 連携広報誌

vol. 75

2022.October

s a i k u r u

明日へつながる、より確かな医療連携をめざして。

特集 消化器内科

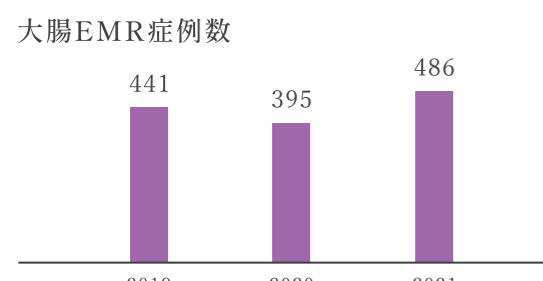
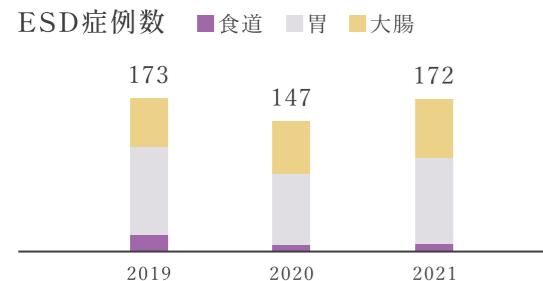
消化器内科



消化器内科部長代行
上原 正義
Masayoshi Uehara

地域から選ばれる
「価値ある」消化器内科を目指して

清秋の候、貴院におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。本年4月より、消化器内科部長代行として、当科の管理運営を担って参りました。現在当院消化器内科には、私以外に副部長3名、医長5名含めて13名が在籍しております。以前に比べて医師数が減少しておりますが、消化器当直体制を維持しながら、従来通りの消化器救急体制を維持し、内視鏡・IVRを中心としたがん診療を行っております。また、症例検討が新型コロナウイルス感染症の流行によってWeb会議に移行ましたが、外科手術・がん薬物療法においても、外科・総合腫瘍科と綿密な連携を行い、患者さん一人一人に寄り添うがん診療を心がけております。私自身は、消化管内視鏡治療が専門ですが、日帰り治療の推進と、より安全で効率的なESD手技を追求していくことを考えております。4月から副部長2名の外来枠が増えたこともあり、今回副部長3名にも各専門分野について現状をご説明させていただきます。当院紹介時の参考にしていただければと思います。以上のように新体制となりましたが、地域から選ばれる「価値ある」消化器内科を目指したいと考えております。今後とも、どうかよろしくお願い申し上げます。



胆 脾



消化器内科副部長
浦田 淳資
Atsushi Urata

胆脾疾患は済生会にお任せあれ!
俺らがやらねば誰がやる!!

胆脾疾患といいますと、非常に狭い領域に発生する疾患で、あまり遭遇しないと感じられる先生方も多いかもしれません。しかし実際は多種多様の疾患と病態がございます。胆道癌、IPNB(胆管内乳頭状腫瘍)、肝粘液性囊胞腫瘍などの胆道系腫瘍や、脾管内乳頭粘液腫瘍、粘液性囊胞腫瘍、漿液性囊胞腫瘍、神経内分泌腫瘍、腺房細胞癌、充実性偽乳頭状腫瘍などの脾臓腫瘍、また十二指腸乳頭部腫瘍も同領域の疾患に含まれます。良性胆道疾患は胆道結石、原発性硬化性胆管炎、IgG4関連胆管炎、先天性胆道拡張症などがあり、脾臓良性疾患も、急性脾炎、慢性脾炎、自己免疫性脾炎、Groove脾炎、脾胆管合流異常、脾管癒合不全などがあります。

これらの疾患によって発生した病態に対しては、CT、MRI、腹部エコー、ERCP、EUSなどを駆使して診断・治療を行います。特にERCPとEUSは、胆脾疾患には欠かせない内視鏡手技です。ERCP関連手技として、胆管管ドレナージ、結石除去を始め、近年SpyGlassという胆管脾管内病変を直接観察し、生検や結石破碎までできる電子胆道鏡を導入し、より正確な診断とダイナミックな治療が可能となりました。EUS関連手技として、腫瘍生検(EUS-FNA)、経胃の脾囊胞ドレナージ、経胃の胆管ドレナージ(EUS-HGS)、経十二指腸的胆管ドレナージ(EUS-BD)などがあり、病態に応じて経皮的エコ下ドレナージ(PTCD、PTGBD)、脾臓性囊胞(PTGBD)も行っております。また再建腸管に発生した胆脾疾患精査治療も、小腸内視鏡によるダブルバルーン内視鏡にて可能となり、十二指腸乳頭部腫瘍に対しても、内視鏡的十二指腸乳頭部腫瘍切除治療を長年に渡って行って参りました。

これらの胆脾疾患の精査・治療をもれなくカバーできることを当科の強みと考え、迅速正確かつ安全をモットーに対応しております。ぜひご相談、ご紹介をいただければと存じます。

2021年 年間実績

ERCP 1,203 件 EUS 287 件

肝がんとIVR



消化器内科副部長
兼
カテーテル・低侵襲血管内
治療センター副センター長
工藤 康一
Koichi Kudo

最新の抗がん剤と伝統の治療技術を
駆使した肝がん治療

肝がん治療は従来のIVR手技に加え近年のがん薬物療法の進歩もあり多岐に渡ります。当科の特徴として、診断から方針決定、各種治療の導入(全身がん薬物療法、RFA、TACE、リザーバー肝動注、緩和医療)に至るまで、同一科内で完結できることが強みです。外科手術や放射線治療をする症例は、各科と綿密な連携のもと治療を行っています。肝がんはがん薬物療法が奏効するようになり、進行がんであっても生存期間延長が望めるようになってきました。長期戦となるため、がんの様々な状況に応じて各治療を組み合わせ、切れ目無い最適な治療を提供できるよう努めています。また病巣の増悪でがん症状が出現した場合、従来BSCとして鎮痛・鎮静で対応することの多かった緩和医療ですが、IVRはがん症状の改善にも応用が可能です。低侵襲処置で苦痛を軽減できる「緩和IVR」という概念が認知されつつあり、特にがん出血や管腔狭窄、有痛性病変、癌性腹水といったoncology emergencyの病態で威力を発揮します。従来の胆管・上下部消化管へのステント留置、腹腔・静脈シャントといった手技に加え、本年度からカテーテル・低侵襲血管内治療センターと共に、大静脈症候群や門脈狭窄に対するステント留置、がん性動脈出血に対するコイル塞栓やカバードステントなども積極的に取り組んでおり、その応用範囲は広がっています。患者満足度の向上に直結する有望な治療と言えます。

進行肝がんによる下大動脈症候群への
ステント留置の症例



消化管と医療安全



消化器内科副部長
兼
TQM部医療安全管理室室長
吉田 健一
Kenichi Yoshida

消化器診療と
医療安全に関わる日々

平素より格別のご高配を賜り、心より御礼申し上げます。今後とも私どもが地域医療に貢献するため、当科の診療の現状をお伝えするとともに、ご挨拶とさせていただきます。

私は主に消化管疾患の診断と治療に携わっております。特に消化管出血などに対する緊急内視鏡においては、当科では日々多くの急诊に対応しております。また一言で消化管疾患と申しましても、上部、下部消化管に加え、小腸に疾患有する患者さんもおられます。また腫瘍性疾患においては、局所治療が可能な初期の方から、手術を要する方、がん薬物療法を選択すべき方、ひいては緩和医療を必要とする方までニーズは様々です。一方でクロール病や潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患の診療においては、近年の目まぐるしい薬物療法の選択肢拡大で、より個々の患者さんの病態とニーズの把握が求められる状況となっております。

そのような中、日々の診療においては、患者さんおよび地域の先生方の声に耳を傾け、皆さんにとって少しでもより良い(高価値の)医療が提供できるよう、取り組んでいきますので、ご高配ならびにご指導のほど、よろしくお願ひいたします。

なお消化器科診療の傍ら、2021年9月よりTQM部医療安全管理室を兼務することとなり、診療科を越えた院内の医療安全に関する実務に関わさせていただいております。インシデントやアクシデント事例の検証において、他の医療者の診療プロセスを評価することの難しさに日々悩む毎日ですが、その過程は当院における医療安全文化の醸成と、診療の質改善につながるものと信じて、日々取り組んでおります。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

緊急内視鏡件数

